

はじめに

道元の代表的撰述書『正法眼蔵』や『永平広録』には、「仏弟子」「仏子」の他に「仏嗣」・「正嫡」の語句を使っている。ちなみに釈尊に対し、通常の尊称の他に親しみを込め「釈迦老子」、禅家風に「瞿曇の老賊」、時に「我が本師釈迦牟尼仏大和尚」等を用いている。禅宗では釈尊を「仏祖（過去七仏の一人）」のトップに位置づける。それを踏まえ道元は、禅宗の法系に属する祖師たちを「仏仏祖祖」ないし「先仏」「古仏」とする。

さて道元によれば、「仏弟子」とは、基本的にまず出家・受戒・剃髪・染衣（青・黒・木蘭の衣を着る）すること、ついで「仏経」を伝持し、「仏法」を習い、「仏道」を明らかにする人である。その際、師資相承の伝法・嗣法が「面授」を通し行われ、仏弟子の標識として重視される十八種物の代表的な袈裟・鉢盂が伝授される（衣鉢を継ぐ）。中国仏教（特に禅宗）では、さらにいつの頃からか「嗣書」等が加わってくる。

その伝法はインドや釈尊在世時に限らず時空を超える事象である。従ってそれらの事象は「過去諸仏の法」であり、「諸仏如来の親受記」とも述べられるように、過去の諸仏ばかりではなく現在の吾人にも及び道元自身が「仏弟子」としてだけではなく「仏祖」のひとりとして徐々に自覚していった過程が判明する。それらの事項を列挙していきたい。

本論（梗概）

- 一、天童山安居当初、僧堂にて開静時「袈裟偈」の誦唱に感涙。「伝衣」の意義を体験す。
- 二、宝慶元年～二年頃、各種の「嗣書」を拝閲。嗣書への信奉を深める。
- 三、宝慶元年五月一日、如浄と「面授」。夏安居中に「伝法（嗣法）」、『眼蔵』仏祖巻奥書
- 四、宝慶元年九月十八日、如浄より「仏祖正伝菩薩戒」を伝授される。「十六条戒」

〔宝慶三年秋、帰朝〕

- 五、（1）「伝法」の自覚。自称「入宋伝法沙門道元」、寛喜三年より寛元三年頃まで使用。
- （2）仁治二年『正法眼蔵』仏祖巻撰述。末尾「如浄大和尚」、宝慶元年夏安居時唯仏与仏。

伝法後の自覚・「五十一代」。 仏祖の行実、瑩山『伝光録』に展開。

- （3）『永平広録』第二 182「如来の慧に入る」、第三 210「夜来三世仏永平窟裏に落在」。

六、「正伝の仏法」・「全一の仏法」・「正法」。「純一の仏法」 / 三教一致批判

- （1）正師（如浄）・正法・正嫡（仏嗣）

「正伝の面授あらざるを正師にあらずといふ。仏仏正伝しきたるは正師なり」『無情説法』
「単伝正直の仏法は最上のなかに最上なり」『辨道話』他

- （2）伝法（嗣書）・伝衣（袈裟・衣法）・鉢盂・洗浄・洗面・嚼楊枝・安居

- （3）清規制定『典座教訓』『赴粥飯法』『知事清規』（根底に『禅苑清規』）。

七、『永平広録』の「上堂」と『正法眼蔵』の「提唱（示衆）」は釈尊の説法に準拠したか。

八、最晩年、遺教経「八大人覺」提唱。「建長五年正月六日、書于永平寺」。釈尊への慕情。

九、建長五年八月二十八日示寂。「遺偈」、先師如浄への慕情。

キーワード 道元、正嫡、我が本師釈迦牟尼仏大和尚